

# エアロフィル（AEROPHILE）グループ： オリンピック聖火台との夢の実現

筆者：パスカル・ブロシャール（*Pascale M. Brochard, Ph.D.*）

[www.aerophile.com](http://www.aerophile.com)



共同創業者である Matthieu Gobbi 氏と  
Jérôme Giacomoni 氏

## Ballon-vasque @AugustinProbst

そもそもの始まりは、1993年に2人の25才の起業家であり友人でもある Jérôme Giacomoni 氏と Matthieu Gobbi 氏の、係留気球（tethered balloon）をパリのテュイルリーにある、1878年の万国博覧会でその前身がフランス飛行船の発明者 Henri Giffard 氏（1825年～1882年）により披露されたまさしくその場所に連れ戻したいという夢からでした。30年後、その夢がついに、2024年パリオリンピックの開会式の目玉となった係留気球で実現しました。

エアロフィル（AEROPHILE）は、弊所の 10 年以上のクライアントです。この度、Matthieu Gobbi 氏は懇切丁寧に、彼らのその素晴らしい成果の道のりを共有してくれました。

**弊所：Matthieu さん、エアロフィルについて、そして、創業 30 年以来最大の功績について、少しお話をいただけませんか。**

Matthieu Gobbi 氏：1993 年の時点で、プロジェクトの目標は、できる限り多くの人々が手頃な価格（たった数ユーロ）で世界で最も汚染の少ない航空に搭乗して飛行経験できることでした。我々が考え出したのは、ケーブルでウィンチ（巻き上げ機）に繋ぎ止めて決まった場所に保持される係留気球でした。それからわずか 1 年後の 1994 年に、シャンティイ城が我々の係留気球第一号を温かく迎え入れてくださいました。



気球第一号は、その気嚢にはヘリウムが充填され、エレベーターとほぼ同じくらのエネルギーを消費する電動ウィンチを使ったものでしたが、大変環境に優しいソリューションでして、たちまち大ヒットしました。わずか 6 か月間で動員数が 3 万 6 千人でした。この最初の成功が、30 年以上続いている人類として、そして起業家としての冒険の起点となりました。世界中に 120 個の気球が販売されました。アジアからアメリカまで、例えば、カンボジアのアンコールワットやアメリカ・フロリダ州オーランドのディズニーワールド、フランス・パリのディズニーランドリゾート、アメリカ・サンディエゴ動物園など、世界で最も人気のある

観光地、そして、パリやベルリン、ロサンゼルスなどの主なメガシティであれば、我々の気球を見つけることができるでしょう。最近エアロフィルにより気球が設置された都市をいうと、2022年にブダペスト、ジェッダ、リヤドとプエルトリコ、2023年にビロクシー（ミシシッピ）、ドバイのパームアイランド、セビリヤとペトラ、そして、2024年にソール、ナイアガラとパリのオリンピック聖火台でした。

エアロフィルがこれまで直面した最大の難関とプロジェクトは、間違いなく、2024年パリオリンピックの開会式のハイライトとなった聖火台でした。プロジェクトのデザイナーである Mathieu Lehanneur 氏は、パリの上空にオリンピック聖火台を浮かばせたかったんです。言うまでもなく、どんな物でも可燃性ガスを使えば飛ばせるわけではありません。送風機で散らされる水滴の霧に点火し、炎に命を吹き込むのに使われる点火システムを使って疑似炎を作るという電気炎プロジェクトの開発のために、EDF（フランスの電力会社）にやりとりしました。エアロフィルは、専門の気球経験に関する相談を受けました。キックオフ会議が大規模でした。炎を起こすためのゴンドラへの水と電力供給の確保や、パイロットが搭乗しない、つまり、ドローンのように全て遠隔操作となる気球の飛行といった新しい特徴が沢山ありました。エアロフィルはあらゆることを試したかったのに制作チームは何も公開したくなかったので、機密保持の観点から、技術的に本当の難局が突き付けられました。光のない真夜中で気球を一度テストし、そして、それとは個別に、地方でクレーンに取り付けて聖火台をテストしました。プロジェクトの進捗スピードといい、機密性といい、円滑な公的認可の取得も、その実現において何もかも並外れでした。美術制作、職人たち及び産業の企業との会議は人間レベルで格別なものでした。



気球の組立（エアロフィルの厚意により）



@AugustinProbst

弊所：エアロフィルは多くの国において特許を所有されています。御社の知財戦略について教えていただけますか。

Matthieu Gobbi 氏：出願に関して、我々の戦略は、面白い技術的解決策ができたと思うと、限定されるが戦略的にターゲットを絞った出願を出来るだけすぐにすることです。潜在的な侵害者からロイヤリティを得ることや法的措置を講じることを考えていないという意味で、現在、攻撃的な知財戦略を立てていません。我々にとって、特許の主な目的は、我々の技術的解決策の革新的な特質について我々のパートナーと投資者を納得させることです。特許はまた、入札要請という状況下で市場の獲得においても重要です。

商標に関しては、特定の区分において名称を広く商標登録するようにしています。必要に応じて、意匠も所有しています。

オリンピックの後、次は何を企画されていますか？

2024 年パリオリンピック聖火台の成功はおそらく、他のオリンピック会場での使用には繋がらないと思いますが、大いに評価と信頼を得たかと感じています。オリンピック大会の間に、今回のオリンピック聖火台を見に来られた多くの外国の代表と会合しました。大きなプロジェクトを統合した我々の実力をパートナーたちに示すことができました。これからは、我々の新しい評価を使って、我々の技術のもう一つの側面である「汚染防止」を開発していきたいと考えています。

パリの南に設置されたアトラクション「バロン・ド・パリ」（Ballon de Paris Generali）が既に空気品質を約束する、本当の空飛ぶ実験室だから、これは、前から存在するものですが、パリのアンドレ・シトロエン公園の上空、高さが 0～300 メートルの微細粒子の数を一日 24 時間、測定しています。

加えて、2021年に、研究と実験を積み重ねて10年後、エアロフィルのエンジニアたちは、特許取得済みの革新的なイオン化・静電集塵処理に基づいた技術である **Para-PM** を開発しました。それは、開放空間又は半開放空間において微細粒子を捕捉するための独特なシステムで、独立性を持ち、95%の微細粒子を除去できるので極めて効率的です。更に最近では、エアロフィルは、**AEROPHILTRES** として知られている、para-PM 技術に基づいて改善されたシステムを開発しました。このシステムは、パリオリンピックの選手村の空気清浄に使われました。



Aerophiltres（エアロフィルの厚意により）

[www.parapm.org](http://www.parapm.org)

空中でも空気用でも、創造されてから30年後の今、エアロフィルは、創業精神を持ち続け、人間と環境を尊重する解決策を以て、絶えずイノベーションを起こしています。